

< 翻訳 >

ダグラス・C・ベイントン
「『野蛮』と『聾啞』－19世紀における進化論と
手話使用を禁圧する運動－」

齋藤友介(訳)*

< Original title >

Douglas C. Baynton, “Savages and Deaf-mutes”:
*Evolutionary Theory and the Campaign Against
Sign Language in the Nineteenth Century*ⁱ

(trans. by)
Yusuke Saito

ヴァン・クリーヴによる紹介

聾の歴史を扱うにあたって、教育はいつの時代においても、第一の関心事であった。聾教育の現場における、口話法論者と手話法論者の間で交わされてきた論争はつとに有名である。この両陣営の衝突そのものは、「互いが、己の立場は正しく、相手方は間違っていると頑として譲らない」といった具合に、比較的明快に描出することが出来ようⁱⁱ。しかしながら、聾の歴史を扱う研究者による、この衝突の社会的かつ理論的な起源についての検討は、つい最近になって緒に就いたばかりである。対立するふたつの陣営の主張を具体的に述べると、一方の口話法論者の立場は、聾という聞こえない子どもに、敢えて「話す」ことと「唇を読む」力量を身につけさせることが必要なのだと、断固として主張し、他方の手話法論者は、手話こそが聾児の教育にとって、必要不可欠だと力説するといった、対照的なものである。

この小論において、ダグラス・ベイントンは、19世紀末の米国という、特定の時代と場所において、それまで優勢であった手話法が、如何なる理由によって、急速に口話法にその優位を譲り渡したのかという主題について、丹念かつ学究的な検討を展開している。彼は社会思想史の視点から、この問題に関する検討を展開する。すなわち、その時代の人々の行動を方向づけたり、助長させたりする、いくつかの信念の解釈と結びつけながら、考察を進めている。具体的には、彼はダーウィニズムとそれに続く進化論の思潮が、どの様にして、口話法論者に与することになったのかを検証していく。

* 文学部 教育学科

19世紀後半における米国の知識人を惹きつけた、進化論という科学的な信念のもと、「原始的」と判断されたものは、如何なるものもうち捨てられたことが、指摘されている。これら知識人によれば、手話言語とは言語が音声言語に進化する前段階の、ひとつの稚拙な言語形態であるとされた。存亡を駈けた競争のもと、最終的に最適な言語としてスピーチのみが生き残り、アメリカ先住民といった原始的な生活を維持する人々の間での、例外的な使用を除けば、手話は既に社会から姿を消した。音声言語はより高度で、進んだ文明のもとで使用される言語と見なされる一方で、手話は進化の滞っている人々の生活と関連づけて、論じられたのであった。

さらに、ベイントンは口話主義と人種優越論の関係性を指摘している。実際にこれらふたつの価値判断をとともなう信念体系は、20世紀初頭のほぼ同時期に、その隆盛を呈した。口話主義者は、手話を使う人々は、類人猿やアメリカ先住民、アフリカ人と似たり寄ったりだと、憚ることなく言い放った。そして、彼らはこれらの人々を、白い皮膚をもつアメリカ人や北ヨーロッパ人と比較して、劣った存在として扱った。また、アンヌ・カルタラー口は、フランス語こそが高度な表現を可能とする、世界中で最も分化した言語だと信奉する、フランスにおける熱心な口話法推奨者の類例を示している。

本論文、すなわちベイントンの研究それ自体に価値があることは言を待たないが、リーキーの研究と同様に、聾の歴史の存在を示し、その研究の方向性を示した点においても、高く評価されるものである。幅広い歴史的文脈において、聾の人々に関する重大な論争を提起することを通して、その真の歴史的な意義が浮かび上がってくる。教訓的な観点から単に憤慨するだけではなく、聾の歴史研究に携わる者は、歴史のおよび今日的な両方の観点から、論争の核心に迫ることが出来るだろう。何よりも、本論文の理解を通して、我々は新たな視点を手にすることが出来るだろう。

本論

19世紀後半に起こった、聾学校における手話言語の使用を禁圧する運動は、米国における聾児に対する教育を一変させるほどの、劇的なものであった。遡ること1817年に聾児のための米国初の学校が創設されて以来、1860年代まで、ほとんどの聾学校教員が、手話言語を教育に必要な不可欠なものだと考えていた^{1) iii}。ある教員が「崇高な言語としての手話」と呼んだ事実からも明らかであるように、ある世代の教員達は、手話言語を単に指導において使用したのみならず、それを教育場面で、いかに有効に使いこなすべきかを巡って腐心した²⁾。彼らは手話言語を賛美すると同時に、敬意をもってこの言語と向かい合い、責任と誇りをもちながら、自らの手話の技術に磨きをかけた。教員のなかには、手話言語の本質や適切な使用法を研鑽すべく、自ら専門書を読む者さえいた。しかしながら、1860年代に入ると状況は一変する。新しい世代の教員達は、それまでの手話の使用に取って代わって、聾児に読唇とスピーチの使用を強制する動きを見せ始

めた。このような読唇及び発声と発語を拠り所とする、口話法という教授法への転換には、多くの要因が複雑に関与しているが、その要因のひとつとして、当時新たに台頭しつつあった、進化論が含まれていた。進化論の思潮は、手話言語が音声言語よりも劣っているという、当時の人々の理解に加担した側面がある。手話のごく少数の「野蛮」な人間にのみ適したもので、文明人には馴染まないものとされた。

19世紀第四半期になると聾教育の現場では、ふたつの敵対する立場が、互いの主張を繰り広げるに到った。多くが年配の教師達から構成される手話法論者達は、敵方の比較的若い教員達からなる口話法論者に対抗して、手話言語の使用をあくまでも守り抜こうと抵抗した。大部分の学校では、1860年代から1870年代になると、口話法による訓練が開始された。しかしながらこのこと自体は、口話法に付随する問題の核心ではない^{iv}。口話法論者達は口話に依存したコミュニケーション訓練を強調したのみならず、全てのクラスにおいて、聾児に対して口話のみによって授業を行った。口話法論者が声高に非難するところによれば、手話言語の使用を認めることは、聾児の知的能力に悪影響をあたえたとされた。すなわち、聾児の英語学習に負の干渉を及ぼすと同時に、口話コミュニケーションを進める際の前提となる、聾児にとっては容易なことではない、英語学習に対する動機づけそのものを低下させる。口話法論者は聾学校から完全に手話言語を根絶することの必要性を訴え、加えて可能であれば、学校を一步外に出た、家庭や地域からも手話が姿を消すことを熱望した³⁾。

大局的に見れば、この時期の口話法論者のこうした運動は失敗に終わった。というのも、何よりも聾者の間で手話言語は使われ続け、聾コミュニティによる強力な支援のもと、大切に守り育てられた。聞こえない両親は、我が子が手話言語を使うことを許容し、これら聞こえない家族のもとで育つ聾児達は、家庭内で培われた手話を、学校に持ち込み、クラスの仲間を広めたのである。事実、手話言語の使用を禁じた大部分の聾学校においてさえ、教員は手話の駆逐を徹底出来ずにおり、このことがその時代の「口話法の失敗」として、禍根を残すことになった。多くの聾者にとって、口話によるコミュニケーションは、あまりにも実用性を欠いたものであった。同時に手話言語は、後の時代に学校現場から完全に姿を消すようになると、聾コミュニティ内部で大切に育まれることになる^{4)v}。

それでも、口話法は聾教育に対して甚大な影響を与えた。1900年までには、全米の聾学校で学ぶ、4割近くの子どもが、教室における手話言語の使用を禁止された。また5割以上の子どもが、学校での一日のうちの一部の時間を口話によって指導されていた⁵⁾。さらに第一次世界大戦の終わり頃になると、聾学校で学ぶほぼ8割の子ども達は、手話言語を一切使わずに指導されるという状況に至った^{6)vi}。1970年代に入り、再び教室で手話言語の使用が認められるようになるまで、口話法は正当な地位を占拠し続けたのであった^{vii}。

19世紀も終わり頃になると、もはや口話法に対する支持は、何ら目新しいものではなかった。米国における口話法は、1860年代以前から進展しつつあったものの、目に見える成果を上げる

ことが出来なかった⁷⁾。19世紀を通して長い期間にわたり、主流派の地位にあった手話法が、なぜ、世紀末になって急速に口話法の台頭に対して、屈服したのであろうか。いったい、何が起きたというのだろうか。

聾教育における手話使用の禁圧を訴える運動は、社会の動きと無関係なものではなく、アメリカ文化そのものの発展という、より大きな文脈と関連づけられうるものである。すなわち、19世紀後半の進化論の隆盛期における人間観と、そうした歴史的な文脈における、手話言語の位置づけについての、人々の新たな理解を示すものと言えよう。

この新しい歴史的な人間観の一例として、ジョン・M・タイラーによる1899年に述べられた次のような発言がある。アマス・カレッジの学長職にあったタイラーは、アメリカ口話指導推進協会(AAPTSD)の夏期会合の席上で、口話法の教師とその支持者を前にして、この国では人類の発達史、すなわち、生物学的歴史観に立脚した、[聾]教育のための科学的な体系を、我々は手にすることが出来ないまま、今日まで過ごしてきた、と発言した^{viii)}。続いて、教育の到達点を探求するにあたって、我々は人類の起源とその発達について学ばねばならないと述べると共に、聴衆に対して人間の起源と発達についての、主要なふたつの理論の概略を紹介した⁸⁾。

第一の理論は創造論であり、人間は神により、誕生と同時に現在の姿を与えられた。かつては精神的にも身体的にも、現在よりもより良い状態にあった。人間は丘を下り、初期の清純な状態から堕ちていった、というものである。第二の理論は進化論であった。タイラーは進化論が正しいことは勿論のことだ、と確信しており、彼の講演を聴きにきた多くの聴衆もまた、既に進化論を理解すると同時に受け入れていた⁹⁾。手話言語の使用を推奨する古い世代の教師と、手話言語の禁圧を主張する若い世代の教師の間には、決定的ともいえる、ある種の文化的な確執が存在した。前者の古い世代の教師達の多くは、チャールズ・ダーウィンの『種の起源』(1859)が出版される以前から聾教育の職場に身をおき、創造論の理論に基づいて、自分たちの信念体系を構築させていた。一方、若い世代に属する、手話言語の使用に反対する教師の間では、進化論に基づく世界観が共有されていた。

ダーウィンにより1859年に発表された、如何にして進化が展開するのかといった、自然選択を含む、詳細な進化論のメカニズム自体は、19世紀の中葉を過ぎても、米国内でそれほどの普及をみなかった。しかしながら、進化に関する一般的な思潮は、猛烈なスピードで市民に受け入れられていった^{10) ix)}。進化論的な発想が、アメリカ文化に定着した、ちょうどその頃に、聾教育においては、口話法が優位な地位を固めつつあったのである。当時の社会には、進化論からヒントを得た類の、様々なアナロジーや説明、そして考え方が散見されるようになったのである¹¹⁾。口話法の主張が米国の聾教育を一変させ始めようとしていたのと、まさに同時期に、進化論はアメリカ国民の自己受容の仕方、さらには世界観のあり様に、根本的な変更を迫りつつあった^{x)}。このことを聾者ならびに聾教育の見地から捉えるならば、人々の言語に対する考え方において、看過できない大変深刻な変化が生じていたのである。具体的には、手話を含む身振り言語に比し

て、音声言語に相対的に高い地位や価値が、付与されるようになったのである。

タイラーが聴衆に語ったところによれば、聾学校の教員達にとって、近年、発表された進化論を正しく受け止めることが、まずもって肝要である、とされた。さらに、その確固たる証拠を持たないにもかかわらず、[今日の]人類にあっても、いささかなりとも高度なそして良い方向に向かって、日々変化し続けていることが強調された。当時における進化論の一般的な解釈を反映してか、止まるところを知らない人類の進化は、一方において、人間に対して弛まぬ努力を求めているのだ、とタイラーは述べている¹²⁾。さらに、遠い昔の獣や人類の祖先から受け継いだ、ある種の遺産を排除した時にのみ、人類は人種においても前進と向上のコースを歩むことが可能になるとされた¹³⁾。作り手不詳の次のような詩を引用しつつ、タイラーは熱弁をふるった。

上を向いて前進しなさい 労働には獣の猛烈さをもって打ち込みなさい
そして 類人猿のように下等で野蛮な人間を
この世から 葬り去ろうではないか

タイラーは、まるで大人が子供じみたものを、捨て去るかのように、人類は「野蛮」なものから、「脱皮」せねばならないと力説した。しかしながら、如何なる手段をもって、この特性は「獸的」であり、逆に他のある特性が「真に人間的だ」といった判断を加えることが、出来るのだろうか。それにはまず、どの様な特性に着目したら、高等な動物と下等な動物を区別することが可能になるのか、注意深く学ぶ必要があるだろう。自然の女神によって、我々人間の祖先達が、進化の各段階において、どのような試練を与えられたのかを、もし仮に聾学校の教師達が理解することが出来れば、聾児に対する日々の指導に有益な示唆が得られるだろうとタイラーは述べた。より端的には、もし如何なる気質や性向、そして知的能力の成長が期待され、また逆に如何なるものが、厳格に抑制されねばならないのかについて、自然界の理解に沿って、教師達が熟知することが可能となれば、教師達は聾児の何を伸ばし、何を抑制すればよいのかを、見分けることが出来るようになるだろう。最後にタイラーは我々および同胞における、自らによる生活や行動を展開することの重要性を力説した。すなわち、永年の歴史における、人間発達に認められる向上傾向に倣い、さらにそれを前進させるような、生活や行動が求められるとした。さもなければ、我々は己の一生を、棒に振ることになるだろう、とタイラーは付け加えた¹⁴⁾。

19世紀を通して一般的であった、人間に関する推測のひとつに次のようなものがある。人間が音声言語を駆使できるようになる前には、コミュニケーションにおいて、手話言語に類する何らかの手段に依存していた、というものである¹⁵⁾。手話を推奨する一部の教員はこの着想に興味をもち、聾教育の専門誌である *American Annals of the Deaf* (AAD) 誌で議論を展開した。教師達は この着想、すなわち、手話言語あるいは身振り言語は偉大な古代の人々の言語であることに加えて、多くの言語学者がこれらのコミュニケーション手段を、人間の言語の起源であると考えた。

そして彼らは、神の御心により、音声言語に先立って、手話言語が必然的に現出したということに、誇りに感じていた¹⁶⁾。一方、口話法の立場に身を置く教師達は、別の視点からこの着想に多大なる関心を示し、手話言語を推奨する陣営とは、全く異なる解釈を行った。先に述べた手話言語を推奨する世代の教師達にとって「最初の言語」とは、神の天地創造に近づくことを意味するものであった。対照的にポスト・ダーウィン世代の口話主義者にとっては、手話が太古から存在することは、天地創造への接近どころか、類人猿との肖似を意味するものに他ならなかった。

人類の進化は丘を下るどころか、常に上に向かって進んできたのであり、人間は歴史の当初から存在するものではなく、生物の進化を経ての、最終的な産物とみなされた。進化論に馴染んだ世代にとって、言語は人間の精神に起因する生得的なものではなく、思考や想像、そして創造時に神によって授けられた良心をも包含した、不可分な心的諸特性のうちのひとつであるとされた。それどころか、言語とは長い時間をかけて、動物としての進化のプロセスを経て、ようやく到達した、特別な能力であるとされた。このような進化という物差しで手話言語を捉え直すと、それは多くの野蛮な音声言語にすら劣るような、低次な言語であると理解され、同時に動物と人間を結びつける、ある種の類推を人々に喚起することとなった。サイエンス誌に寄稿したある著者は、動物の中でも、人間と類人猿では別の方向に進化を遂げたものの、当初のコミュニケーションに使用された手段は、身振りであるにせよ、スピーチであるにせよ、未熟なものであっただろう、と述べている。しかし、人間においては身振り言語が先行して発達し、後に音声言語が取って代わったとされた。他方、類人猿では身振りのみを発達させるに止まったと説明された¹⁷⁾。

19世紀後半、多くの言語学者は「言語学的ダーウィニズム」と呼ばれた理論に傾倒しつつあった。この理論によれば、「存亡をかけた戦い」を経て、劣った言語は消滅し、優れた言語がそれに取り替わるとされた¹⁸⁾。身振りを使ったコミュニケーションは、時代遅れの敗者の言語だと、見なされるようになりつつあった。一例として、米国の言語学者であるウィリアム・ドワイト・ホイットニーは、太古の時代、人間のコミュニケーションは、音調、身振り、そして顔の表情といった、お世辞にも上等とは言えない要素から成り立っていたものの、その後、自然選択と適者生存のプロセスを経て、音声に軍配が上がったと指摘した¹⁹⁾。

太古の時代の人々が使用した言語を、直接に研究することは出来ない。スピーチや身振り、そして顔の表情といったものの「化石」は存在せず、要するに記録に留められていないのだ。しかしながら、19世紀最後の数十年において、人類学者は「野蛮な人種」と見なした人々を、進化の初期段階の例証に用いるアプローチを試み始めた。そこでは、右肩上がりの直線的な進化モデルが想定され、「野蛮」な人々、すなわちアフリカ人、アメリカ先住民、オーストラリアのアボリジニなどを、より速いスピードで進歩を遂げた文化から、置いてきぼりを食った「生きた化石」と見なして、観察や記述を試みた²⁰⁾。しかしながら、これらの手法は、太古の人々の文化や言語を研究するという目的と照らし合わせた際に、実際には、見せかけだけのまやかしであることは

明白であった。

また、著名な人類学者であった、エドワード・タイラーは次のように述べている。野蛮人や半文明人においては、高い文化をもつ民族に比して、会話の場面で、自己をむき出しにしたパントマイムを多用する傾向が認められる。このタイラーの指摘が意味するところは、言語が未だ発達の途上にあり、早期の段階においては、身振りは人間の重要な表現手段のひとつであったものの、言語そのものが高度に体系化されてくると、その役割を終えて消失した、というものである²¹⁾。アメリカ先住民の手話研究者として知られる、ギャリック・マレリーもまた、次のような主張を展開している。「文明」と「野蛮」の人々を区別するに際しての、最も重要な基準となるのは、使用する音声言語における、語彙の豊かさと言語の明晰さである。手話言語によるコミュニケーションは、かつて広範な普及をみた、もしくは少なくとも、そう信じられたにも関わらず、言語の生存競争に耐えうるものではなかった、とされた。もっとも、当時の人類学の趨勢では、太古の人々においてさえ、スピーチを圧倒するほどに、手話が一般的な使用をみた事実は無かったとされる。しかしながら、一方においてマレリー同様に、手話がひとつの技術として確立した後、長いこと音声言語は完成途上にあったという考え方も、共有されていた²²⁾。いずれにせよ、あらゆる手話言語は、未分化な進化段階への停滞とこじつけて、論じられるようになったのである。

このような経過のもと、聾者がコミュニケーションに際して使う手話を、「野蛮人」の言語と起源を同じくするという見解が、じわじわと、人々の心に浸透してしまふことになったのである。野蛮人の身振りサインと聾者の手話に共通性があることは、市民と専門家の双方において、既に常識となった感がある、とタイラーは述べている²³⁾。ダーウィン自身も、聾啞者と野蛮人の双方に利用される、コミュニケーション手段としての身振りについて言及している²⁴⁾。さらに、マレリーによれば、手話言語は社会進化の野蛮な段階において、一時期、隆盛をみたものの、そこで進捗が停止してしまつたがために、まさに太古に生きた「穴居人」の言葉である。この手話を使いさえすれば、今日のインディアン〔アメリカ先住民〕や聾啞者とも、正確に意思疎通をはかることが可能だとされた²⁵⁾。あるサイエンス誌への寄稿者によれば、手話言語は低い文明しかもたない部族で使われているが、反対に音声言語はより高い文明のもとで使用されると同時に、言語のなかでも最高の階層にあるとされた。さらにこの寄稿者は、手話言語が聾啞者の訓練において使われていることにも触れて、身振り言語は言語として未分化であり、現在では衰退の一途を辿っていると結論づけた²⁶⁾。また、ニューヨーク・イブニング・ポスト紙には、次のような記事が掲載された。イタリア系移民の用いる豊かな身振りに関する記事の中で、多くの未開人において身振りが補完的に使われているとする識者の意見を根拠に、筆者は身振りの使用そのものに加えて、音声言語の代わりやそれを補完する目的で身振りを使うことは、知的能力の脆弱さの現れであり、文明人たるものは、身振りを放擲せねばならないと指摘した。加えて、筆者は同様にアメリカ先住民が、身振りを媒体に、コミュニケーションを図っている実態を紹介してい

る^{27) xi}。

当然のことであるが、手話法論者はアメリカ先住民が、他の部族とのコミュニケーションを図る必要が生じた場合に、実際に手話言語を使っている事実を、既に十分に理解していた。手話を擁護する人々は、聾者の手話言語とアメリカ先住民による手話言語の比較を行った。さらに彼らは、これらの手話を古代ローマ時代に深化をみた、高度なパントマイムの技と、同じ組上において論じたのである。そして、手話が備える統語上の素性と、古典ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語、中国語との通底を見いだしている²⁸⁾。これらの検討は、決して聾者の使う手話言語の価値を、貶める意図でもって行われたものではなかった。それどころか、これら他の言語との類縁性の発見は、身振りによるコミュニケーションが、自然が人間に与えてくれた、技術であることを示している。よって、上記の知見は、身振りとは未開の地であろうが、文明化された地であろうが、[必要があれば、] いつでも、どこでも使用可能な、意思伝達のための手段であることの、傍証に他ならなかった²⁹⁾。

一方、口話法を擁護する人々は、手話陣営とは全く別の切り口で、歴史を検討した。彼らの推論によれば、手話言語は遙か昔に音声言語に、その優位な地位を譲り渡している。そして、そのこと自体が手話の劣り様を示す、何よりの証拠であり、[手話が] この世から消え去るのは、必然だとされた。1897年にある口話法論者は次のような指摘を行っている。しばしば手話法論者達はアメリカ先住民と聾者の手話言語の類似性を云々するが、我々は観察されたこの種の事実、一々疑問を呈するようなことはしない。しかしながら、そもそも、こういった事象を検討すること自体が、生産的な展開を期待出来るような、値打ちのあるものとは思えない。一方で、彼は先に述べた観察される事実に対して、先人達とは全く異なった見解を述べている。野蛮人達は互いのコミュニケーションを図る目的で、手話という記号体系を保持してきた。しかし、我々の生きる現代は、世界的に見ても、既にこのような野蛮人が使う道具である手話を捨て去る段階に到達している。手話という言語は過去の遺物であり、現代文明のもとでは、その役割を終えている。啓蒙の進展により、幸運にも現代の聾学校で学ぶ子ども達は、アメリカ先住民やアフリカの野蛮人などが、意思伝達に際して使う道具より、よっぽど上等なコミュニケーション手段を使うことができる。すなわち、高度な文明のもとでは、手話言語は音声言語により取って代わられており、聾教育において手話言語を使用することは、大昔の未開な時代を彷彿させるものであり、文明の進歩からの享受を、自ら放棄するに等しい^{30) xii}。

この種の、勝手な類推に基づく、手話の原始性を巡る言説は、聾教育の文献においては、さして珍しいものではなかった。米国において、早くから口話法による教育を成功させた、クラーク聾学校の校長職にあったガーディナー・G・ハーバードによれば、聾者の手話言語は、北アメリカの先住民や南アフリカのホッテントット [コイ族] の言語に酷似するものとされた³¹⁾。全ての入学生に厳格な口話法を適用し、最も早くから州の財政的援助を取りつけた経緯をもつ、ペンシルベニア聾学校のJ・D・カーク・ハフによると、人間は野蛮な状態から抜け出すことが出来たので

あるから、我々は自分の考えを表現する際に、身振りを使うことを、この際、決然と放棄すべきだ、とされた。そして、身振り言語の束縛から聾児を解放することこそが、教師に課せられた責務なのだ、と主張した³²⁾。英国における口話法の指導的な立場にあった、スザンナ・E・ハルはAAD誌において、音声言語こそが、言語の歴史における「勝者」であるのだから、聾児の教育に手話言語を使用することは、系統発生上の先祖返りを、わざわざ試みるようなものだ、と述べている。さらに彼女は、19世紀の今日に至って、アメリカ先住民や他の野蛮な部族の言語を使うことに、果たして聾の子ども達は満足するであろうか、と疑問を呈している³³⁾。

進化途上の存亡を巡る競争において、音声言語が手話言語に取って代わったという言説は、聾教育の分野でも共有されつつあった^{xiii}。一例として、1883年にエマ・ガレットという教師が残した、灰めかしを含んだ、何とも意味深長な次のような記述がある。もし聞こえる人々にとって、未開な手話よりも、歴史的に勝ち残った音声言語の方が優れているのであれば、同様に聾者にとっても、最適な言語として音声言語を選択すべきである³⁴⁾。新しい世紀を迎えた1910年になっても、口話法論者は相も変わらず、同様の指摘を同様のやり方で、繰り返し発言している^{xiv}。人間が既に音声言語を発達させているのに、数千年も昔の、手話言語を使う人種のような状態に、聾者を置き去りにするのは誤りであると³⁵⁾。

聾者にとって手話言語は害悪であり、その使用は「野蛮」もしくは「未開」な状態へ、彼らを先祖返りさせるようなものである。さらに悪いことに、手話言語は動物の世界と結びつけられたのである。進化論の理論は、何が人間と動物を分けているのかという問いに対する、人々の回答の仕方に大きな変更を余儀なくした。人間と動物とは究極的に別物であり、長い歴史のなかで、人々はそのような動物との対比という視点から、常に自らを定義づけてきた。人間が動物と異なる独自の姿に至った経緯や、人間が常に文化を築き得たことに付随する、様々な質問に対しては、本能的ではなく理性的であること、歴史や文化を有していること、痛みを感じ我慢ができること、自意識を有していること、道徳心を備えていること、道具を使用可能なことといった、具体的な回答が準備された。この他にも、さらに多数の回答群を、根気強く作成することが可能であった。しかし、そもそも、これらの回答群自体が他の被造物である生き物から、人間を明確に区別する目的で用意されたものであった³⁶⁾。

自分達とは異質の文化が現存する事実に加え、歴史のなかで見いだされる、性格を異にする時代が存在したこともまた、上記の問いに対して、別の角度から回答を提供しているかの如く考えられ、実際にこのねらいに照準をあわせて議論が行われた。人々は自らをどの様に定義するのか、はたまた、人間は何に価値を見いだすのか、人々は人間一般を如何なるものと理解するのか、これらの問いの設定の仕方そのものの中に、既に潜在的であれ、回答が埋め込まれている。19世紀初頭から中葉において、手話法論者達は、人間の独自性は「魂」(soul)に宿ると考えていた。そして永遠の魂の所有の如何をもって、人間と動物の世界の間に明確で強固な区分線が引かれ、人間とその他の被造物との、根本的な区別がなされたのである。人間の独自性や、言語能

力、道徳性、判断力といったものは、魂という上位概念に包含される、あくまでも副次的なものであるが、これらは動物には存在せず、魂をもつ人間のみが備える力だと理解された。

手話法論者であるハートフォード聾学校のC・ストーンによれば、教育に課せられた最重要の課題は、聾啞児の魂を呼び覚ますことにあると考えられた³⁵。聾啞児においては、魂への傾注を促すことを抜きに、子どもらを取り囲む事物や被造物から、彼らを解き放つことは不可能だと見なされた。その結果、聾啞児には、木々や動物には見いだされ得ない、ある種の「価値」が存在するとされた。このある種の「価値」とは、子どもの身体そのものでもなく、身体を構成する一部でもないが、その中には知性や想像力、手話言語を使う能力、倫理的な感性が宿っているとされた。それは不朽のものであり、ひとたび、聾啞の生徒達がこのある種の「価値」を理解することが出来さえすれば、物事を感じ取り、考えることが可能となり、続いて、動物からの脱離に至るものと考えられた。そして、最終的には魂と呼ばれる新しい方法でもって、自らの存在意義を明らかにする真の力を、整えることが可能だとされたのである。魂を理解することが出来なければ、無教養な聾者は、動物のような水準の生き方に止まることを余儀なくされ、動物的な享樂を甘受するのがせいぜいである、とされた³⁷。

聾児の教育についてのこのような説明は、ストーンの世代の教師においては、ひろく共有されていた。ルーシアス・ウッドラフは、十分な教育を受ける機会に恵まれなかった聾者は、概して魂を欠いた存在のように見えると嘆いている。さらに、人々に共通する人間らしさを持たないのでは、肉体的な秩序すら不完全なものになると述べている³⁸。教育によって手話を使用する力が授けられ、そのことによって、動物を僅かに凌いだ程度の、墮落した状態から聾者は抜け出し、真の人間の兄弟として連帯をはかることが可能になる、とヘンリー・キャンプは指摘している³⁹。J・A・エアーズもまた、教育の重要性について言及するなかで、最も大切なのは、倫理および信仰上の品性を、正しく発達させることだ、と述べている。それまで人類の家族として、迎え入れてもらえず、その結果、大きな損失を被ってきた聾者であるが、手話言語の使用を通して、はじめて人類という家族の一員としての居場所を彼らは手にし、加えて、人々や神とのコミュニケーションを図ることが可能になった、とされた⁴⁰。

手話を推奨する世代の教師にとって、聾者は神の世界から切り離された存在であり、彼らが不朽の魂を享受出来ないことが、何よりも切実な問題であった。単なる肉体的な存在から区別される、彼らの内なる思慮深い力に気づかせるよう努めなければ、聾者は神についての深く正しい理解に到達することが出来ない、とされた⁴¹。手話はこのような問題を解決するものと考えられた。一方、手話法論者は、抽象的な思考を伝達するに際して、手話が必ずしも完璧な交信手段ではないことを、しばしば自ら認めている、しかしながら、他方において、神の理解、すなわち倫理観の涵養や神への帰依といった体験においては、抽象的思考は必須ではない、と彼らは考えた。彼らは「心」(heart)こそが、人間性の崇高な構成要素であると同時に、もし我々が聾者の魂を救済したいのであれば、それは目指せねばならぬ、最も重要な到達点であると確信したの

だ。心への交信を図ることに限ってみれば、一見すると音声言語の方が適しているように思われる。しかし、真の意味で心が求めているのは、その独特な交信により相応しい、目や顔の表情、態度、体の動きといった、身振りに依存する言語なのである。手話言語は、その揺るぎない、かつ高く評価された心に訴求する力によって、聾者を人間以下と思量される状態から救いだし、真の人間に至らしめるのである⁴²⁾。

歴史家であるポール・ボーラーは次のように書き残している。進化論が人間の独自性に関する、従来の伝統的な宗教上の考え方に与えた影響は、まさに衝撃的とも言えるものであった⁴³⁾。自然界における人類の位置と性質に関する、諸々の宗教的な信念に対しては疑いが投げかけられ、その変更を余儀なくされたものの、しかしながら、人間の独自性そのものについて、人々の抱く信念は依然として衰えることがなかった。19世紀の終わり頃までには、何故、人間は他の動物と根本的に異なるのか、という問いに対する一般的な説明において、人々が魂を有しているためだ、という言説はもはや説得力を失いつつあった。これに代わって、今度は人間が音声言語、すなわちスピーチを産生できることに、その理由が求められるようになった。換言すれば、音声言語を操作する知性は、人類における最高の到達点であると同時に、必要不可欠なものとなった。トーマス・H・ハクスリーのような、ダーウィン理論の擁護者が書き記しているように、人類の高潔さに対する崇拜は、新たな知見の出現によって軽減された。人間は未だ獣性を備えている一方、他方において、人間だけが明快で合理的な音声言語を操作する、驚くべき才能を有している⁴⁴⁾。

このような、音声言語の操作の可否を基準に、人間を動物と区別する着想は、もっぱら進化についての思潮と関係している。こういった類の着想そのものは、さして新しいものではなく、その起源は少なくとも古代ギリシャの時代にまで遡ることが出来る。そして、19世紀のヨーロッパや米国の文献には、この種の記載が散見される。しかしながら、ある時代における特定の文化の優れた点を強調する動きは、これまでもあったものの、19世紀後半の英米の思潮では、不朽の魂の所有から、音声言語の獲得に、強調されるポイントが移っていったのである。

このような変化がおきた理由のひとつに、ダーウィンによる『人間の進化と性淘汰』の出版があった。従来は、より高次の統合の役割を担う能力は、魂という概念によって説明され、この魂をもって、人類は動物界から脱離を果たしたとされた。しかしながら、実際のところ、このような能力は、未発達な他の動物においても、存在すると考えられるようになった。人間に先験的とみなされてきた諸々の能力は、むしろ、より高度に発達した結果であり、能力の素地そのものは、進化の初期段階からすでに存在していたとされた。このような言説のものでは、もはや魂による説明は、説得力を欠くものになった、とダーウィンは指摘した⁴⁵⁾。

いずれにせよ、人間の歴史を説明しようとする進化論の文脈にあつては、魂を位置づけることは容易なことではなかった。人間を動物から区別する際の指標として、魂の有無を語る一方で、同時に、他方では、動物が発達して現在の人間に至ったと述べることは、いくらひいき目に見て

も、深刻な矛盾をはらんだものであった。いったい、正確にはいつ頃、人間は魂を手に入れたのであろうか。他の属性と同様に、不朽の魂は進化の賜なのか、又はある時期に突如として生まれ、人間以前の被造物に、吹き込まれた属性なのだろうか。魂の概念を巡っては、多くの宗教家によって、進化論との調和の可能性が模索されてきた。しかしながら、「ある種のデザイン」、すなわち、動植物が現在の環境に適応出来ていること自体が、知的デザインの証拠だとする議論は、もはや不要になりつつあり、進化論の登場によって主流派の位置から外された。勿論、デザイン説は完全に論破されはしないものの、もはや魂は人間の様々な能力を説明するにあたって、不要になったのである。

付言するならば、進化論とは、科学と大衆心理の双方における、当時の科学的自然主義を指向する社会の流れの一部であり、自然のなかの一存在としての人間を説明するに際して、魂はその重要性を急速に失っていった^{xvi}。19世紀米国のキリスト教徒にとって、魂という用語は、進化の産物を語るに際して都合が良いわけでもなく、はたまた、科学主義的な説明に耐えうるものでもなくなっていた⁴⁶⁾。このような状況のもとで、上記のふたつの条件を満たすものとして、新たに着目されたのが音声言語、すなわちスピーチであった。

一例としてトーマス・H・ハクスリーは次のように述べている。類人猿と人間の間の知的な乖離を説明するにあたっては、音声言語の産生と理解に使われる、感覚と筋の存在が必要である。音声言語が使いこなせるか否かは、人間の証とも言うべきものである。誕生時には話せない状態にある人間は、もし仮に話せない人間の社会で暮らすことを余儀なくされたならば、類人猿やチンパンジーよりも、ほんの僅か知的に勝る行動を示すに止まるだろう⁴⁷⁾。社会学者であったチャールズ・ホートン・クーリーによれば、音声言語の獲得は、人間を他の動物と区別する特性であると同時に、人間の前段階から人間に至るに際して、通過が求められる関門に例えられるとされる⁴⁸⁾。子ども達の使う教科書では、動物は様々な鳴き声を出し分ける事が出来るが、人間だけが音声言語を使いこなすことが可能であるとの記述がなされ、ここでもあくまでもスピーチが強調された⁴⁹⁾。

聾児の教育に携わる者もまた、人間の独自性を語るために、このスピーチという決まり文句を、使い始めるようになった。1867年にクラーク聾学校の創設に関わったルイス・ダッドリーによれば、校内に設けられたスピーチ部門の重要性は、単なる一指導部門を超えるものであり、その役割は低次の動物の段階から、子ども達を人間に引き上げることにある、とされた⁵⁰⁾。ダッドリーはまた、自身の勝手な想像と伝聞を織り交ぜながら、次のように述べている。手話を使って指導を受ける子ども達は、外見から判断すると確かに人並みであるのに、能力の点では、人間の僅か半分程度までしか到達していない。しかし、その中の一人の少女が最近になり、話すことを学習した結果、見違えるほど表情は明るく、また目は光り輝くようになり、それは、彼女が人間存在としての崇高さを意識するようになった現れだと、彼はコメントしている。ダッドリーはこれこそが本当の意味での、崇高さであると総括している⁵¹⁾。ペンシルベニア聾学校に勤めるあ

る口話主義の教師は、*AAD* 誌に寄せた文章のなかで、口話による指導には大変な困難が伴うものの、音声言語の獲得こそが、人間をより低次の動物と区別する指標である以上、我々聾学校教師は、口話指導における労働上の負担を、甘受すべきだと述べている⁵²⁾。

音声言語、すなわちスピーチが人間の指標と受容されるようになった一方において、手話言語は徐々に獣性を秘めたものと理解されるようになった。1873年にベンジャミン・D・ペッテンジェルという、ペンシルベニア聾学校の教師は、サルのような大げさな顔の表情や身振り以外の何ものでもない、という手話言語に対する様々な非難に対して、何としても、手話を守らねばならない、と述べている⁵³⁾。手話言語を擁護する立場にあった、ケンダル校のセーラ・ポーターは、1883年に手話の使用に対する一般的な非難、すなわち、あなた自身が手話を使ってみなさい。人々はあなたを、サルに似ていると見てとる、といったフレーズが、繰り返し述べられる実態に対して、これらの執拗な批判そのものが無意味である、と当時の窮状を訴えている⁵⁴⁾。スコットランド出身のある教師は、1899年の*AAD* 誌において、[手] 指を使ったコミュニケーションの様子がサルのような印象を人々に与えると聾者に伝えることは、大きな誤りであると述べている⁵⁵⁾。一方、1897年には、ある口話法の教師によって、我々は犬が情動を示す際に、尻尾や耳を動かすのと同類な次元の手話を、もはや言語と見なすことは出来ない、という言説を残している⁵⁶⁾。

聾者は手話言語を使用する際に、手のみならず顔の表情も手がかりにしている。しかし、この顔の表情の使用を巡っても、手話法を推し進める教師と口話法の立場に立つ教師では、全く異なる解釈を加えている。進化論の理論が世に浸透する以前には、顔の表情を意識的に変化させてコミュニケーション場面で使用できるのは、人間のみだと理解されていた⁵⁷⁾。『表情 - その解剖と原理 -』の著書で知られる、情動に関する身体的表現についての、第一人者であったチャールズ・ベルや当時の研究者達は、人間は情動の表出を目的として、特定の筋を与えられ、それを発達させてきた、という仮説を提示した。顔の表情の変化により感情を表現する能力そのものは、創造主から与えられたものだ、と彼らは考えた。すなわち、顔の表情は諸種の人為的な慣習に阻害されることのない、人間の魂にとって、とても自然なコミュニケーション手段だと理解された。トーマス・H・ガローデットもこの着想に言及し、極めて明快で輝かしい魂の発露、と述べている⁵⁸⁾。

その後、1848年には手話法の教師であるチャールズ・P・ターナーは、顔の表情の使用に付随した、獣性という批判に対して、野性的で乱暴な、或いは穏和で平和を好むといった行動上の傾向は、狂暴または従順といった、その人の内面の現れではない。今一度、考えてみると、我々は外的な状況に左右される本能といったものを越えた、何かを見いだすことが出来る、と述べている。このターナーによる、人間のみが、他の動物と区別される表情という能力を備えているとする言説に対して、当時の読者は、特段の驚きや困惑を感じなかったと思われる。人間だけが魂を持つことを許され、顔の表情とは魂のある種の目的とも言いうるもので、換言するならば、顔

つきをもって、魂が表現されるとされた。このように、彼の観察した事柄、すなわち、顔の表情は手話言語によるコミュニケーションに際して必須の付随物であり、手話言語がもつ力や美しさは、この付随した表情に依存するところが少なくないとされた。よって、意図された表情の変化はコミュニケーションに必須のものであり、崇拜をもって人々に受容されてきた⁵⁹⁾。トーマス・H・ガローデットもまた、創造主が我々に目と顔の表情を使う知恵を与えてくれたとする見解に賛同しており、このことにより、魂の内なる活動を表現することがはじめて可能になる、と指摘している⁶⁰⁾。顔の表情を、感じたことや考えを伝達する手段として使うことは、人間を他の動物と区別する指標であることに加えて、コミュニケーションを素晴らしく豊かなものにする。手話言語を受容したこの世代の教師達は、手話の熟練者達が、如何にして聖書の中の物語を語る際に、時には顔の表情のみでもって、聾者の心に話の内容を届け得たかを、喜んで語り合った⁶¹⁾。

しかしながら、ダーウィンの『人及び動物の表情について』が刊行されると状況は一変した。顔の表情についての従来の解釈に、重大な変更が迫られるようになったのである。ダーウィンにとって、表情とは神からの授かり物でもなければ、人間らしさの指標でもなく、ましてや人間の魂の独特な働きの発露などではなかった。ダーウィンは表情を巡る従来の諸研究に疑問を呈し、ベルが行ったように、人間と低次の動物との違いを可能な限り強調した。具体的には、情動の表出が人間に固有だという従来の見解や、人間が当初から現在のかたちでこの世に登場した、という言葉は誤ったものであるとして、徹底的に批判が加えられた。人間の表情の中には、動物と共通するものがあり、人間の表情の起源は、人間の祖先である動物に求められるとされた。こういった観点に立てば、実際に人間と他の動物の間に確認された類似性そのものが、いにしへの人間は、より低次の動物のような状態にあったという、ダーウィンの仮説に有利な証拠となった⁶²⁾。もはや、顔の表情は人間を動物と区別する際の指標としては機能しなくなり、身振り同様に、我ら人間が低次の動物であった時代の、痕跡と理解されるようになった。折しもその少し後になって、当時、流行の物書きが、次のような指摘を行っている。類人猿は特別な能力を備えているものの、それはより未発達な自己認識と表現のための方法であり、具体的には身振り言語と表現に際して使われる顔筋を指す⁶³⁾。

聾児に接する教師達も、このような思潮の変化による影響を受けた。ある匿名の著者は、「[聾]教育には嫌気がさした」と題した小論をAAD誌に寄稿している。この著者は、聾教育現場において、教師がしかめ面のような表情、身振り、大げさな体の動きを使うことに取り上げて、手話言語の使用に対する手厳しい批判を加えている⁶⁴⁾。また、ある手話法に依拠する教師もまた、手話を使う者を標的に、サルのような醜い顔の表情を使っていると嘲笑する、口話法陣営からの批判に反論している⁶⁵⁾。このように、顔の表情や身振りは、音声言語というより高度で繊細な言語との対比のもとで、未発達で低次の言語として扱われた⁶⁶⁾。聾者がサルのようにだと非難されないためにも、コミュニケーション場面において、不快な印象を与える、醜い顔の表情を、極力使わないように助言がなされた⁶⁷⁾。サイエンス誌におけるある寄稿者は、また異なる角度か

ら、聾学校の生徒達の様子について、次のような記述を残している。収容者達の顔の表情や手と腕を上下に動かす様子は、正気の間人が、突如として狂気の群衆の中に放り込まれたような印象を私に与えた、といったメタファーを述べている⁶⁸⁾。というのも、当時の認識では、精神病は進化の途上における、より低次の段階への、一種の退行ととらえられており、このメタファーにおいても、聾者の手話によるコミュニケーションを、低次の動物と関連づけようとする点では、既に述べた諸見解と通底する性質を有している⁶⁹⁾。

生物の歴史に関する理解において、進化論がひとたび主流の位置を占めるようになると、歴史的に身振りが音声言語に先だって発現したという信念は、以前とは全く異なる意味合いを帯びてきた。手話論者にとっては、手話言語のもつ力は、音声言語に劣るものではなく、魂に包含される能力のひとつと考えられた。それは創造と摂理に基づく神からの賜り物であり、聾者は自らが魂を有する存在であることを理解することによって、人間になるのだとされた⁷⁰⁾。聴者もまた、手話の研究から、少なからぬ恩恵を受けている。何故、創造主はコミュニケーションをする際に、顔の表情と身振りを使いこなす素晴らしい能力を、我々人間に与えたのであろう。この問いに対して、トーマス・H・ガローデットは、スピーチによるコミュニケーションを補うことに加えて、他者の魂に到達できるような、コミュニケーションを可能にするためではないか、と述べている⁷¹⁾。

しかしながら、口話法に慣れ親しんだ世代の教師は、手話言語はそれ自体が人間に相応しくない特性を備えていると指摘した。すなわち、「解決」と受け止められていた手話言語が、一転して、「問題」と位置づけられるようになったのである。19世紀末までには、聾児に接する全ての教師にとって、子ども達に聴者が使用している音声言語を身につけさせることが、最も大切な指導目標となった⁷²⁾。換言すれば、音声言語の獲得そのものが目的と化し、アレクサンダー・グラハム・ベルをして、音声言語すなわちスピーチの価値を問うことは、生きることの価値を尋ねることに等しいと言わしめた⁷³⁾xvii。このように、口話論者にとって、音声言語のもつ意味は、人間であることの意味と同義であり、話せるようになることは人間になることを意味するようになった。ダーウィンの進化論に起因する、不幸な副産物である、このような思考図式が成立し、一方においては手話法を衰退させ、他方においては口話法の隆盛に加担する様々な理由づけが、以降、数多く報告されるようになったのである。

(原注)

- 1) ハートフォード校 [コネチカット聾唖施設] 設立から40年以内に設立された寄宿制聾学校は20校に及び、19世紀末までには50校を超えた。“Tabular Statement of Schools for the Deaf, 1897-'98,” *AAD* 43 (January 1898): pp.46f. 口話法による最初に成功を収めた学校は1867年に創設されたニューヨーク聾唖院であった。初期の学校については、以下を参照のこと。John Vickrey Van Cleve and Barry Crouch, *A Place of Their Own: Creating the Deaf Community in America* (Washington, D. C.: Gallaudet University Press, 1989), pp.29-59. [土谷道子訳・小林祐子監修:「誇りある生活の場を求めて」, 全国社会福祉協議会, 1993];

- Harlan Lane, *When the Mind Hears: A History of the Deaf* (New York: Random House, 1989), pp.206-251; Phyllis Klein Valentine, "A Nineteenth Century Experiment in Education of the Handicapped: The American Asylum for the Deaf and Dumb," *New England Quarterly* 64 (September 1991): pp.355-375.
- 2) Charles P. Turner, "Expression," *AAD* 1 (January 1848): p.78.
 - 3) 口話主義者の動向の概観については以下を参照のこと。Van Cleve and Crouch, *A Place of Their Own*: pp.106-141.; Lane, *When the Mind Hears*: pp.339-414.; Richard Winefield, *Never the Twain Shall Meet: Bell, Gallaudet, and the Communication Debate*, (Washington, D. C.: Gallaudet University Press, 1987).
 - 4) 以下を参照のこと。W. Earl Hall, "To Speak or Not to Speak: That is the Question Behind the Bitter Deaf-Teaching Battle," *Iowan* 4 (February-March, 1956): p.9, この問題についての1950年代におけるアイオワ聾者協会と聾学校の間で展開された、闘争に関する簡潔な詳細については以下を参照のこと。John Van Cleve, "Nebraska's Oral Law of 1911 and the Deaf Community," *Nebraska History* 65 (Summer 1984): pp.195-220; Van Cleve and Crouch, *A Place of Their Own*, pp.128-141.
 - 5) 完全な口話法により指導が23.7パーセント、指文字を使用した指導が14.7パーセント（但し手話は含まず）、授業でスピーチを使う指導が53.1パーセントというベルによる報告がある。Alexander Graham Bell, "Address of the President," *Association Review* 1 (October 1899): pp.78f. ベルの示した数字は次の文献と差異が認められる。一例として Edward Allen Fay in "Progress of Speech-Teaching in the United States," *AAD* 60 (January 1915): p.115. 数値が異なるその理由としては、算出するにあたり、完全な口話法による指導と、部分的に口話を採用する指導、部分的に手指を使用する指導を厳格に区別したため、とベル自身は説明した。
 - 6) "Statistics of Speech Teaching in American Schools for the Deaf," *Volta Review* 22 (June 1920): p.372.
 - 7) Lane, *When the Mind Hears*, pp.281-336.
 - 8) John M. Tyler, "The Teacher and the State," *Association Review* 1 (October 1899): pp.19f, p.26.
 - 9) Tyler, "The Teacher and the State," pp.20f.
 - 10) Peter J. Bowler, *Evolution: The History of an Idea*, (Berkeley: University of California Press, 1989), p.188; John C. Greene, *Science, Ideology, and World View* (Berkeley: University of California Press, 1981), p.52. 英国の大衆紙における Alvar Ellegard による網羅的なレビューにおいて、進化論の基本的な考え方が1970年までには、ひろく英国市民に受容されていたと述べている。詳しくは以下を参照のこと。Darwin and the General Reader: The Reception of Darwin's Theory of Evolution in the British Periodical Press 1859-1872 (Göteborg, Sweden, 1958). 米国においては上記と比較可能な検討はなされていない。しかし、より限定されたものとして、Richard Hofstadter による報告がある。『種の起源』の刊行から10年後には、大衆誌は、従来の懐疑論と慎重に対峙することを通して、進化論についての本格的な議論を行ってきた。以下を参照のこと。 *Social Darwinism in American Thought* (Boston: Beacon Press, 1955), p.22.
 - 11) Daniel Levine, *Jane Addams and the Liberal Tradition* (Madison, Wis.: State Historical Society of Wisconsin, 1971), p.94. Levine の指摘によれば、社会進化論は万能の教義といった、それほど保守的な教義ではなかった。進化論のアナロジーは米国の家庭に、驚くべき早さをもって浸透した。一方、近年の Peter J. Bowler による見解によれば、Levine の見解には修正が必要だとされ、社会進化主義 (social evolutionism) は、本質的にダーウィンの理論と異質のものであり、急速に浸透したのは、社会進化主義であるとされた。以下を参照のこと。Bowler, *The Non-Darwinian Revolution: Reinterpreting a Historical Myth* (Baltimore: John Hopkins University Press, 1988).
 - 12) Bowler, *Evolution*, pp.296-299.
 - 13) Tyler, "The Teacher and the State," p.22.
 - 14) *Ibid.*, pp.22-26.
 - 15) 以下を参照のこと。Gordon W. Hewes, "Primate Communication and the Gestural Origin of Language," *Current Anthropology* 14 (February-April 1973): p.5; A. S. Diamond, *The History and Origin of Language* (New York, 1959), p.265; Alf Sommerfelt, "The Origin of Language: Theories and Hypotheses," *Journal of World History* 1 (April 1954): pp.886-892; Edward B. Tylor, *Researches into the Early History of Mankind*, (London: J. Murray, 1865; New York, 1878), p.15.
 - 16) B. D. Pettingill, "The Sign-Language," *AAD* 18 (January 1873): p.9; Remi Valade, "The Sign Language in Primitive Times," *AAD* 18 (January 1866): p.31. さらに以下も参照のこと。Warring Wilkinson, "The

- Development of Speech and of the Sign-Language," *AAD* 26 (January 1881): pp.167-178; Harvey P. Pett, "Notions of the Deaf and Dumb Before Instruction," *AAD* 8 (October 1855): p.10; Warren Robinson, "Something About the Sign Language," *Silent Educator* 1 (1890): p.216. ミラノ会議のスピーチにおいて、Edward M. Gallaudet が主張したところによれば、手話は人類にとって「母なる言語」とされた。*Speech for the Deaf. Essays Written for the Milan International Congress on the Education of the Deaf, Milan, Sept. pp.6-11, 1880* (n.p., n.d., copy located in the Volta Bureau archives, Washington, D. C.).
- 17) Joseph Jastrow, "The Evolution of Language," *Science* 7 (June 18, 1886): pp.555f.
 - 18) James H. Stam, *Inquiries into the Origin of Language: The Fate of a Question* (New York: Harper & Row, 1976), pp.242-250.
 - 19) William Dwight Whitney, *The Life and Growth of Language: An Outline of Linguistic Science* (New York: D. Appleton, 1875), p.291.
 - 20) Bowler, *Evolution*, p.233; Frederick E. Hoxie, *A Final Promise: The Campaign to Assimilate the Indians*, (Cambridge: Cambridge University Press, 1989), pp.115-145.
 - 21) Tylor, *Researches*, p.15, p.44.
 - 22) Garrick Mallery, "The gesture Speech of Man," *AAD* 27 (April 1882): p.69; Garrick Mallery, *Introduction to the Study of Sign Language among the North American Indians as Illustrating the Gesture Speech of Mankind* (Washington, D.C., 1880), reprinted in *Aboriginal Sign-Languages of the Americas and Australia*, vol. 1, ed. D. Jean Umiker-Sebeok and Tomas A. Sebeok (New York: Plenum Press, 1978), p.13; さらに以下を参照のこと。Tylor, *Researches*, pp.77f.
 - 23) Edward B. Tylor, "On the Origin of Language," *Fortnightly Review* 4 (April 15, 1886): p.547.
 - 24) Charles Darwin, *The Expression of the Emotion in Man and Animals*, (1872; Chicago: University of Chicago Press 1965), p.61. [浜中浜太郎訳：「人及び動物の表情について」, 岩波文庫, 1931].
 - 25) Mallery, *Introduction to the Study of Sign Language*, pp.12-14. Mallery の論文は、しばしば *AAD* に再載されている。以下も参照のこと。Garrick Mallery, "The Sign Language of the North American Indians," *AAD* 25 (January 1880): pp.1-20; Garrick Mallery, "The Gesture Speech of Man," *AAD* 27 (April 1882): pp.69-89.
 - 26) Jastrow, "Evolution of Language", p.556.
 - 27) Thomas Francis Fox の引用を参照のこと。"Speech and Gesture," *AAD* 42 (November 1897): p.398, p.400. この小論の著者はジェスチャーに対する一般的な態度に触れており、当時のジェスチャーを軽視する視点に、著者自身が同意するものではない。
 - 28) Isaac Lewis Peet, "Preliminary Remarks-Signs versus Articulation," *National Deaf Mute Gazette* 2 (February 1868) p.6, pp.8f; さらに以下も参照のこと。Robinson, "Something About the Sign Language," 216; Thomas H. Gallaudet, "On the Natural Language of Sign Language- I," *AAD* 1 (October 1847): p.59.
 - 29) Gallaudet, "On the Natural Language of Sign Language- I," p.59.
 - 30) John Dutton Wright, "Speech and Speech-Reading for the Deaf," *Century Magazine* (January 1897): pp.332-334.
 - 31) "Proceedings of the American [social] Science Association," *National Deaf Mute Gazette* 2 (February 1868): p.5.
 - 32) J. D. Kirkhuff, "Superiority of the Oral Method," *Silent Educator* 3 (January 1892): p.139.
 - 33) Susanna E. Hull, "Do Persons Born Deaf Differ Mentally from Others Who Have the Power of Hearing?" *AAD* 22 (October 1877): p.236.
 - 34) Emma Garrett, "A Plea that the Deaf 'Mute' of America May be Taught to Use Their Voices," *AAD* 28 (January 1883): p.18.
 - 35) A. L. E. Crouter, "The Development of Speech in the Deaf Child" (Pamphlet, n.p., n.d.), Gallaudet Archives; Box: PSD Dr. Crouter's Speeches (reprinted from the Transactions of the American Laryngological, Rhinological and Otological Society, 1910). 以下の社会学者 Charles Horton Cooley の研究も参照のこと。*Social Organization: A Study of the Larger Mind* (New York: C. Scribner's Sons, 1909), p.67: おそらく、スピーチが大きく進展する以前に、人工的なジェスチャー言語には、ある程度の組織化が認められたと思われる。
 - 36) 例えば Keith Thomas を参照のこと。*Man and the Natural World* (New York: Pantheon Books, 1983); Peter

- Singer, *Animal Liberation: A New Ethics for Our Treatment of Animals*, (New York: Avon Books, 1975), pp.192-222; Mary Midgley, *Beast and Man: The Roots of Human Nature* (Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1978); James Turner, *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian Mind* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1980).
- 37) Stone, "On the Religious State," pp.137-141.
 - 38) Lucius H. Woodruff, "Grace of Expression," *AAD* 2 (July 1849): p.195.
 - 39) Camp, "Claims of the Deaf," pp.214f.
 - 40) Ayres, "An Inquiry," p.223.
 - 41) Isaac Lewis Peet, "Moral State of the Deaf and Dumb Previous to Education, and The Means and Results of Religious Influence Among Them," *AAD* 3 (July 1851): p.212
 - 42) Gallaudet, "Natural Language of Signs- II," pp.88f; Lucius H. Woodruff, "Moral Education of the Deaf and Dumb," *AAD* 3 (January 1851): p.66, p.70.
 - 43) Paul F. Boller, "The New Science," in *The Gilded Age: A Reappraisal*, ed. Howard Wayne Morgan (Syracuse: Syracuse University Press, 1970), p.247.
 - 44) T. H. Huxley, *Man's Place in Nature* (London: J. M. Dent, 1906), p.104.
 - 45) Charles Darwin, *The Descent of Man and Selection in Relation to Sex* (New York: Appleton, 1896), pp.65-96. [長谷川眞理子訳「人間の進化と性淘汰」, 文一総合出版, 1999].
 - 46) Jon H. Roberts, *Darwinism and the Divine: Protestant Intellectuals and Organic Evolution, 1859-1900* (Madison: University of Wisconsin Press, 1988), pp.205-507; Paul A. Carter, *The Spiritual Crisis of the Gilded Age*, (DeKalb, Ill.: Northern Illinois University Press, 1971), pp.85-107; James R. Moore, *The Post-Darwinian Controversies: A Study of the Protestant Struggle Come to Term with Darwin in Great Britain and America, 1870-1900* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979), pp.232f, pp.266f, pp.336f; Norman Pearson, *The Soul and Its Story: A Sketch* (London, 1916): pp.4-23; D. R. Oldroyd, *Darwinian Impacts: An Introduction to the Darwinian Revolution* (Milton Keynes: Open University Press, England, 1980), pp.250-252.
 - 47) Huxley, *Man's Place in Nature*, pp.95f.
 - 48) Cooley, *Social Organization*, p.70; さらに以下を参照のこと。Franklin Henry Giddings, *The Elements of Sociology* (1898; New York: Macmillan Co., 1916), pp.238-241.
 - 49) Frank Overton, *Applied Physiology: Including the Effects of Alcohol and Narcotics, Advanced Grade* (New York, 1908 [1897]), p.298.
 - 50) Lewis J. Dudley, "Reports of the Corporation," *Seventeenth Annual Report of the Clarke Institution for Deaf-Mutes* (Northampton, Mass.: Clarke Institution for Deaf-Mute, 1884), p.7.
 - 51) Lewis J. Dudley, "Address of Mr. Dudley in 1880," *Fifteenth Annual Report of Clarke Institution for Deaf-Mutes*, (Northampton, Mass.: Clarke Institution for Deaf-Mute, 1882), p.7.
 - 52) Emma Garrett, "report of the Teacher in Charge; Branch for Oral Instruction [Pennsylvania Institution for the Deaf and Dumb]" (January 1); Gallaudet Archives. Box: PSD Sundry Reports, Communication, etc., dating prior to 1890.
 - 53) Pettingill, "The Sign-Language," p.4.
 - 54) Sarah Harvey Porter, *AAD* 39 (July 1893): p.171.
 - 55) R. W. Dodds, "The Practical Benefits of Method Compared," *AAD* 44 (February 1899): p.124.
 - 56) Wright, "Speech and Speech-Reading," pp.337f.
 - 57) 19世紀において表情を考察した動機については、Darwinによる Expression の序を参照のこと。
 - 58) 以下の文献を参照のこと。Robert J. Richards, *Darwin and the Emergence of Evolutionary Theories of Mind and Behavior* (Chicago: University of Chicago Press, 1987), pp.230-234; Gallaudet, "Natural Language of Signs- II," p.81.
 - 59) Turner, "Expression," p.77.
 - 60) Gallaudet, "Natural Language of Signs- II," p.81.
 - 61) 例えば以下を参照のこと。Turner, "Expression," pp.77f; Lane, *What the Mind Hears*, pp.174f.
 - 62) Darwin, *Expression*, p.10.
 - 63) Jastrow, "Evolution of Language," pp.555f.

- 64) Anon., "The Perversity of Deaf-Mutism," *AAD* 18 (October 1873): p.263.
- 65) Pettingill, "The Sign-Language," 4. 必ずしも新しい関心ではなかったが、手話法に親しんだ世代に比して、口話法論者において、異なった含意をもって受け取られた。1849年に Lucius Woodruff は、聾啞者が手話を使う際にみせる、独特な顔の表情に苦言を呈している。彼の関心からすれば、このような繊細さを欠いた表情は見苦しいだけでなく、育ちの悪さを示すものであり、周囲に不快な印象を与えるとされた。しかしながら、手話という言語が備える、持ち前の美しさは、たとえ適切な説明がなされたとしても、好ましい表情を発達させるにあたって、有利だと判断されることはなかったと思量される。"Grace of Expression," *AAD* 2 (July 1849): p.193を参照のこと。
- 66) Samuel Gridley Howe et al., *Second Annual Report of the Board of State Charities* (Boston, 1866): pp. liii-iv.
- 67) Unsigned excerpt from the Kentucky Mute, "Vulgarity in Sighing," *Silent Educator* 1 (January 1890): p.91.
- 68) B. Engelsman, "Deaf Mutes and Their Instruction," *Science* 16 (October 17, 1890): p.220.
- 69) 以下を参照のこと。Gilman, *Disease and Representation: Images of Illness from Madness to AIDS*, (Ithaca, N. Y.: Cornell University Press, 1988), pp.129-132; *The Expression of the Emotion* のなかで、Darwin が指摘するところによれば、過大な表現は精神異常の特徴であるとされた。彼はまた、精神異常とは、より低次元進化段階への先祖返りであるという説に賛同をしている。Gilman によれば、顔の表情のコントロールが不能になることは、文明人としての行動規範の欠如に他ならず、そうした場合、より低次元で未分化な表現方法が使用される。
- 70) Gallaudet, "Natural Language of Signs- II," p.86.
- 71) *Ibid.*, p.80.
- 72) Susanna E. Hull, "The Psychological Method of teaching Language," *AAD* 43 (April 1898): p.190; Hull は英国出身であったが、米国内でも支持する者が少なくなかった。
- 73) *Proceedings of the Fifth National Conference of Principals and Superintendents of Institutions for Deaf-Mutes*, (St. Paul, Minn., 1884), p.178.

(訳注)

- i 本論文は、米国 Gallaudet 大学の歴史学者である John Vickrey Van Cleve が編纂したアンソロジー、*Deaf History Unveiled: Interpretations from the new scholarship* (Gallaudet University Press, 1993, pp.92-112) に掲載されたものである。従来、米国聾教育における口話法への移行は、1867年のクラーク聾学校の開設と1880年のミラノ会議をターニング・ポイントとして、描出されることが多かった。しかしながら、ペイントンは本論文において、19世紀後半の米国において台頭した後に、20世紀初頭まで通底した、ダーウィンの進化論に起因する社会思潮が、聾教育における手話法の衰退を促し、口話法台頭の遠因となったことを、初めて実証している。後にペイントンは、*Forbidden signs: American culture and the campaign against sign language*, (The University of Chicago Press, 1996) を著している。
- ii 米国における公的かつ体系的な聾教育は、1817年のコネチカット州に設立されたコネチカット聾啞施設（現在のアメリカン聾学校）を皮切りに、約50年間は手話法によって行われてきた。しかし、1867年に口話法によるクラーク聾学校（聾啞院）がマサチューセッツ州に設立されたのを契機に、以降、教授法としての優位性を巡って、口話法と手話法の対立が本格化する。詳しくは以下を参照のこと。John Vickrey van Cleve, Barry A. Crouch, *A place of their own: Creating the deaf community in America*, Gallaudet University Press, 1989, [土谷道子（訳）：「誇りある生活の場を求めて - アメリカ聾者社会の創設-」, 全国社会福祉協議会, 1993, pp.46-48, pp.114-117.], 上野益雄：「聾教育問題史 - 歴史に学ぶ-」, 日本図書センター, 2001, pp.96-107.
- iii 19世紀中葉までの聾教育関連の教育施設の名称には、“asylum”、“institution”といった語が使用されていたが、ペイントンは本論文中で、一貫して“school”を用いており、訳者もこれに従い、「学校」と訳すこととした。
- iv 補聴器を使用することが出来なかった当時の口話法においては、音声言語の受容手段としては、視覚的な言語受容法である読唇（読話）のみにしか、依存することができなかった。なお、難聴者を中心に、補聴器が使い始められるようになったのは1930年代に入ってからである。以下を参照のこと。Jack R. Gannon, *Deaf Heritage: A narrative history of deaf America*, National Association of the Deaf, 1981, p.212.

- v 大都市に聾者人口が集中したパリやロンドンと異なり、米国では、広大な国土と交通インフラの未発達などの理由から、19世紀の州立聾学校は、大部分が寄宿制であり、子ども達は家族と離れて寄宿舎で日々の生活を送った。すなわち、子ども達にとって、聾学校は手話の価値を認める仲間が集う、ひとつのコミュニティであった。寄宿制聾学校の生活について、詳しくは以下を参照のこと。Douglas Baynton, Jack R. Gannon, and Jean Lindquist Bergey, *Through deaf eyes: A photographic history of an American community*, Gallaudet University Press, 2007, pp.29-41.
- vi 近年になり、聾教育現場が口話法一色に染まった、19世紀末から20世紀中葉にかけての、歴史的検証が精力的に進められている。例えば以下を参照のこと。Susan Burch, *Signs of resistance: American deaf cultural history, 1900 to World War II*, New York University Press, 2002, Robert M. Buchanan, *Illusions of Equality : Deaf Americans in schools and factory, 1850-1950*, Gallaudet University Press, 1999, pp.20-36.
- vii 1970年代に入り、聾教育現場において手話が復権した経緯については、以下を参照のこと。草薙進郎 (1989) : 「アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの台頭要因の研究」, 筑波大学心身障害学系
- viii アメリカ口話指導推進協会 (AAPTSD) は後に、アレクサンダー・グラハム・ベル協会となる。ベル協会は口話法の推進母体であり、当時、手話法教師の影響が強かった *American annals of the Deaf (AAD)* 誌 (1848年に発刊) に対抗すべく、1899年には、口話法の啓蒙普及を目的に *Volta Review* 誌を発刊した。
- ix バッツとクレミンは、南北戦争が終結してから第一次世界大戦までの50年間について、「アメリカの知的生活は大きな革命を経験した。人間の一生にも及ばない期間に急激な変化が、宇宙に関する基本的な考え、人間観、人間と自然との関係に対する見解および教育に影響を及ぼし、知識と学習に関する考えにも影響を及ぼした」と述べており、さらに「特に進化論は、伝来の信仰に壊滅的な影響を与え、また哲学、心理学および社会科学に根本的な再考を促した」と指摘している。R.F. Butts and L.A. Cremin, *A History of Education in Culture*, Holt, Rinehart and Winston, 1953, [渡部晶他 (訳): アメリカ教育文化史, 学芸図書, 1977, p.375.]
- x 当時の米国の社会状況について、リーヒーは次のように述べている。「1882年にアメリカにやってきたスベンサーは、大変にもてはやされた。生存競争は人間性を完成させるものだという理由で、非情な競争を正当化することのできる自由放任の資本主義社会の中で、社会ダーウィン主義は、大きな人気を博した。」, Thomas Hardy Leahey, *A History of Psychology: Main currents in psychological thought*, Prentice-Hall Inc., 1980, [宇津木保 (訳): 心理学史 - 心理学的思想の主要な潮流, 誠信書房, 1986, pp.371f.]
- xi 19世紀末の米国では、増加する移民に対する差別と偏見が顕在化しつつあった。特にイタリア人を含む、非プロテスタント系の移民においては、厳しい眼差しが注がれていたとされる。伊藤章: 「移民の国アメリカ」(笹田直人他 (編) 『概説アメリカ文化史』, ミネルヴァ書房, 2002, pp.70-80.)
- xii 横山は19世紀の後半になり、アメリカ先住民が迫害される状況についてふれるなかで、「この掃討戦のなかで『野蛮人』の典型、白人『文明』の対極にあるものとしての先住アメリカ人のイメージは固められた」と指摘している。横山良: 「金ぴか時代と19世紀末のアメリカ」, (野村達朗 (編): 『アメリカ合衆国の歴史』, ミネルヴァ書房, 1998, p.115.)
- xiii バッツとクレミンは「進化過程の個々の説明のなかには、妥当でないものもあったが、主要な主張は19世紀末には、ほとんどすべての領域の思想にまではいつてきた」と述べている。R.F. Butts and L.A. Cremin [渡部晶他 (訳) (前掲書), p.376.]
- xiv ほぼ時を同じくして、ネブラスカ州において、口話法論者と手話法論者を巻き込んで、州立聾学校における手話の使用禁止を求める運動が起こった。その結果、1911年には、州立聾学校に入学する全ての児童に対して、口話法による指導を義務づける法律が制定された。
- xv 宗教教育はいわゆる3Rs (読み、書き、算術) と職業教育に加えて、米国の聾学校における重要な指導内容として扱われていた。詳細は以下を参照のこと。Margret A. Winzer, *The History of Special Education*, Gallaudet University Press, 1993, pp.170-224, Douglas Baynton, Jack R. Gannon, and Jean Lindquist Bergey, *Through deaf eyes: A photographic history of an American community*, Gallaudet University Press, 2007, p.23.
- xvi 阪上は「人文・社会科学者が進化論のアナロジーを用いて、人文・社会科学の科学化をはかる企てが1880年頃から1920年にかけて展開された」と指摘している。詳しくは、以下を参照のこと。阪上孝「ダーウィニズムと人文社会科学」(阪上孝 (編): 『変異するダーウィニズム - 進化論と社会 -』, 京都大学学術出版会, 2003, p.9.)

xvii 電話の発明家として名高いアレクサンダー・グラハム・ベルは、聴覚障害児の指導に携わった父と難聴の母のもとで育ち、自身、聴覚障害者の妻を迎えた。他方において、ベルは急進的な口話主義者の顔を持つ。荒川は「アメリカにおける口話法の全国的展開には Clarke 校の影響は大であるが、個人的な貢献の大であったのは Alexander Graham Bell 1847-1922である」と指摘する。(荒川勇：「欧米聾教育通史」, 峯文閣, 1970, p.370) ベルは豊富な財力と人脈を武器に、聾者の手話の使用に強く反対し、容赦ない執拗な攻撃を行った。彼の個人史と聾者における言語観については、以下に詳しい。Richard Winefield, *Never the twain shall meet*, Gallaudet University Press, 1987. さらに、ベルの優生学への関心と優生学者との親交については、以下の近刊論文で詳細な検討がなされている。Brian H. Greenwald, "Taking stock: Alexander Graham Bell and Eugenics, 1883-1922" in *The deaf history reader*, John Cickrey Van Cleave (ed.), Gallaudet University Press, 2007, pp.136-152.

(2007年9月29日受理)